

総合化によって引き出される 中学生の可能性

飯島博さん(特定非営利活動法人アサザ基金代表理事)

■飯島博さんプロフィール■

特定非営利活動法人アサザ基金
代表理事。

1956年長野県生まれ。86年農林
水産省の非常勤職員、93年霞ヶ
浦・北浦をよくする市民連絡会
議事務局長、99年アサザ基金を
NPO法人化。

アサザ基金は、「霞ヶ浦・北浦
をよくする市民連絡会議」の一
事業部門として、アサザプロジ
ェクトを推進する目的で、1995
年に設立。アサザプロジェクト
は湖の再生事業であると同時に
、地域振興や地域ぐるみの環
境学習プログラムとしても機能
している。

NPO法人アサザ基金

住所：〒300-1233 茨城県牛久
市栄町6-387

ウェブサイト：

<http://www.kasumigaura.net/asaza/>

アサザは、夏から秋にかけて黄色
い花を湖面に咲かせる浮葉植物で
す。

1995年、コンクリート護岸で固め
られ、瀕死の湖とも呼ばれた霞ヶ浦
(茨城県)に、市民によってアサザ
が植えられました。飯島博さんはア
サザ群落を増やし自然の岸辺をよみ
がえらせることを手始めに、「100年
後には大自然を再生して霞ヶ浦にト

キを呼び戻す」という夢を掲げて呼
びかけました。これが自然再生事
業・アサザプロジェクトです。これ
までアサザプロジェクトには延べ10
万人もの人たちが参加しています。

アサザプロジェクトは、飯島さん
が1994年に小中学生と一緒に
なって徒歩で行った霞ヶ浦の調査がき
っかけになってはじまりました。

子どもたちに支えられるアサザプロジェクト

調査には子どもの豊かな 感性が必要

80年代に入って霞ヶ浦の環境が悪
化していきました。流域の森林がど
んどんなくなったり、荒れていった
り、水田も耕作放棄されて、湖に流
れ込む川的环境も悪化するなど、流
域全体で環境悪化が進んでいきまし
た。霞ヶ浦の水質も非常に悪くなっ
ていて、行政も改善の見込みが示せ
なくなりました。僕が勤
めていた筑波研究学園都市の研究グ
ループもいろいろな研究をしている
のですが、みんなばらばらに、個々
の技術の中で、いわば自己完結した
提案だけをしていました。行政も縦
割りで自己完結していて、湖全体、
流域全体をカバーする取り組み、対

策がまったくできなかったのです。

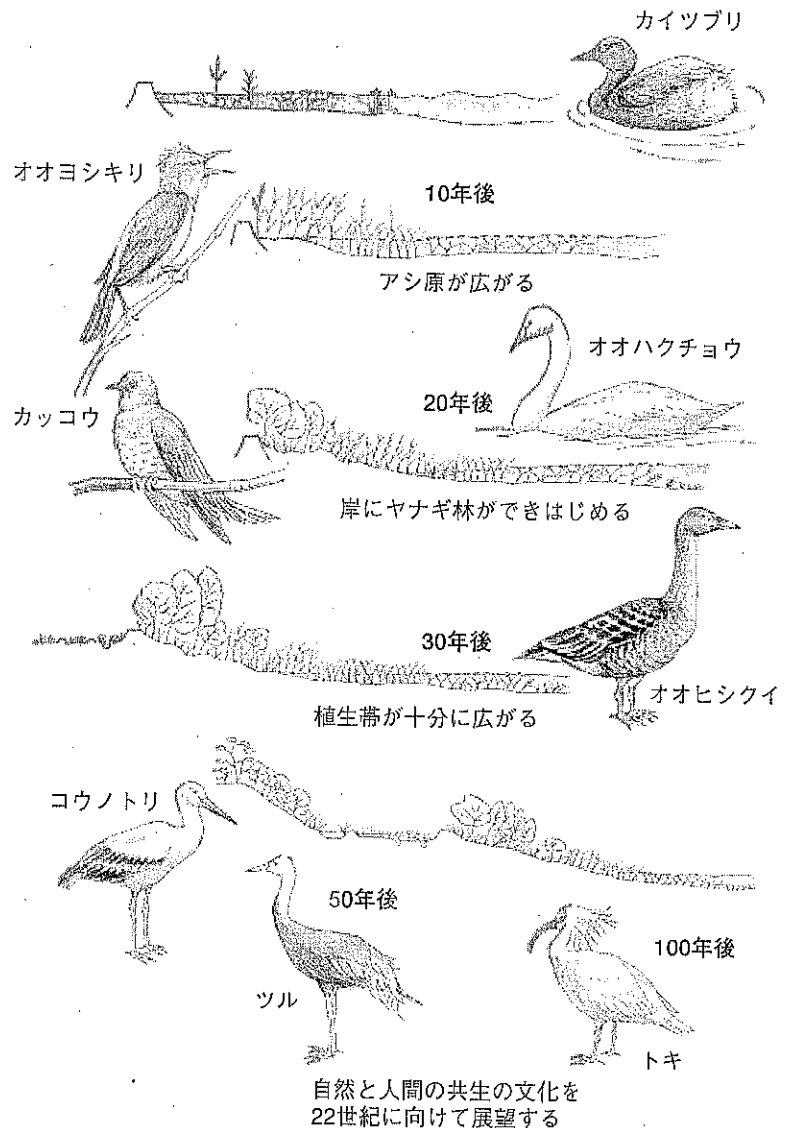
発想の転換をして、別のやり方を
考えなければならない、それはやは
り自分で考えるしかないだろうなど
思い、93年から霞ヶ浦の岸辺を歩い
て調査して、とにかく湖の全体像を
自分でつかみとろうと思いました。
湖の1周は250kmあるのですが、4
周しました。

徒歩の調査には、ほとんど毎回子
どもが参加していました。「霞ヶ浦
のお宝探しに行こう」と、小さなお
宝がいっぱい眠っているから、見つ
けに行こう、すごく大きな物凄いお
宝も眠っているかもしれないから、
探しに行こう、と。小学生から中学
生くらいまでが参加して、当時は主
力は中学生でした。

調査には子どもの目線が必要なん
ですよ。きめ細かく見てくれるし、

100年後、霞ヶ浦に大自然を復活させよう! アサザプロジェクト計画図

アサザプロジェクトは100年の長期計画。
10年ごとの達成目標を具体的な野生生物
を設定して示しています。これからの社
会を野生生物に評価してもらいます



感性が豊かだから、いろいろなもの
を見つけてくれます。今まで大人た
ちが「ダメな場所」「つまらない場
所」「死の湖」といって、そういう
目で見ていた場所が、実はそうじゃ
なくて、よく見たらトンボがいたと
か、昔消えたといわれる水草があっ
たりとか。子どもはちょっとした石
のすきまからでも何でも、本当にす
ごい発見をするんですよ。こんなも
のが残っていたんだと。正直驚くよ
うなものを見つめます。

そんな時、波の強い日に調査をし
ていたら、アサザという水草が波を
やわらげているのを見つけました。

アサザ発見

実はその当時、霞ヶ浦ではコンク
リート護岸によって一度環境破壊し
てしまった場所に、もう一度ヨシ原
を取り戻そうということで、波の対
策がとても重要な課題になっていま
した。波が相当荒くなっていたので
す。建設省（国土交通省）では、石
を積んだ消波堤で波を消して、ヨシ
を植えるというやり方を実験的に始
めていました。でもこれがうまくい
かないのです。波の打ち返しがある
から、深く段差ができてしまったり、

水がよどんでしまったり、魚が行き
来できなくなってしまうたり、自然
な景観にならないのです。大きな湖
だから、並大抵のことではダメだろ
うと、皆あきらめかけていたのです。

そんな時、このアサザに出会った
わけです。もともと霞ヶ浦に生えて
いるアサザという水草を植えて、群
落を増やすことで波を弱める物理的
な機能を活かしていけば、コンク
リートの護岸にされたことによって遠
浅でなくなった湖をうまくヨシ原に
戻していけるのではないかと、自然の
岸辺に返していくことができるので
はないかと思いつきました。これで

全く展開が変わってきました。

生徒の直談判から 学校で普及

アサザは、まず種を集めて、それを一般の人たちに配って、育ててもらおうと考えました。アサザは成長が早いので、1~2年で大きくなったら、湖に植えに来てもらおうという単純な仕組みを考えました。「アサザの里親制度」です。

95年に呼びかけたら、最初からそれまでの運動とは違う変化を感じました。中学生や小学生が直接応募してくるのです。親は全然関係なくて、自分で手紙を書いたり、電話してきました。そのうちの中学1年の女子生徒に種と資料を送ってあげたら、1週間後に「何百部送ってください」と言ってきました。「どうして？」って聞くと、「校長先生のところへ行って直談判して、学校中でやるようにしてきました」と。それが、ものすごい変化です。

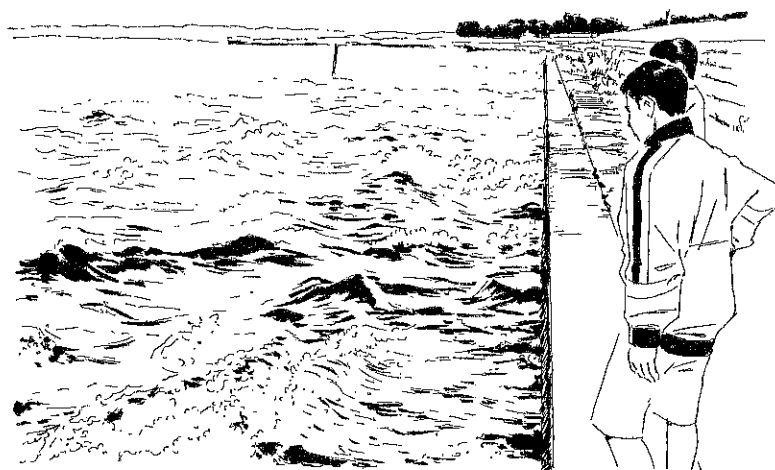
それまでの霞ヶ浦の市民運動にしろ行政にしろ、霞ヶ浦についての呼びかけというと、ゴミを拾おうとか、汚れたものを流さないようにしようとか、これ以上汚くならないようにしよう、〇〇しないようにしよう、〇〇はやめようということばかりでした。何かをしよう、新しく何かを作りあげようという呼びかけは初めてだったのです。

もう一つは物語を描きました。アサザをみんなで植えて、うまく根付いて、育ってくれたらいいね。みんなであまく育てて植えたものが、育って広がっていったら、ひょっとしたら自然の回復力を引き出して、だんだん波で砂が運ばれて湖底の傾斜が自然の勾配に近いものに回復してきたらいいねと。こういう一つの霞ヶ浦再生物語を描いたわけです。その物語が特に子どもたちの心に響いたのだと思います。

学校の先生方の反応もアサザプロジェクトはまずは夢があっていいというわけです。霞ヶ浦を教材にいろいろ学習したいけれども、とにかく展望がなかったと。アサザは霞ヶ浦を再生させていくんだ、という夢や展望が示せるからいいと、先生方も積極的に受け入れてくれるし、子ど

もたちや親たちも受け入れてくれるようになって、アサザプロジェクトの輪がまたたく間に広がっていったのです。

伝統的な河川工法を活かして、流域の里山から出る木を使って粗朶消波堤を作って、アサザやヨシが根付くまでの間、暫定的に設置したらどうだろうというアイデアも出てきました。力づくで波を抑えるのではなく、波を適度にやわらげる伝統的な河川工法で、波を消すのではなく、やわらげるという発想です。こういった展開にどんどんなってきた、最初は漁協とやっていたのですが、そのうちに森林組合も参加してくる、いろいろな人が参加してきて、建設省も予算化しはじめて、アサザプロジェクト自体が大規模な事業になってきました。



アサザプロジェクトは子どもたちと行った霞ヶ浦の
岸辺調査がきっかけではじまりました



自然との共存。霞ヶ浦の子どもたちとアサザの花

アサザプロジェクトは、湖から森林まで全部含めた、トータルな、新しい社会システムの提案です。自己完結しない循環するプロジェクトです。湖の水源の荒廃した里山を間伐したり、下草刈りをして管理し、その間伐材で湖の粗朶消波堤をつくっています。粗朶消波堤がアサザの揺りかごとなり、また魚礁となって、水産資源も増えていきます。

自然と人間が共存できる社会を

アサザというものに最初に出会ったから、湖に元々あるものから、いろいろな働きを引き出していく、自然の力と人間の知恵の協働によって、何かことを成していこうという発想になったのだと思います。アサザに着目して、自然のはたらきを活かして、力づくではなく、一つのシステムを作っていくことができるようになってきたな、と思ったときに、ふと、中学生の頃に真剣に考えていたことを思い出したのです。

僕は小学生のときは自然が結構豊かな地域にいました。それから東京に引っ越してきました。当時は公害がひどい時代で、中学生の時は東京の渋谷区にいたのですが、光化学スモッグが出始めて、郊外の学校で女の子が倒れたりとか、という事件がありました。イタイイタイ病、水俣病、新潟水俣病、四日市喘息という

4大公害病訴訟が行われていた時代でした。

すごくショックだったのは、水俣病で一番被害を受けたのは、漁師さんということです。都市生活者ではなく、伝統的な漁の仕方をしていた漁師さんたちが、一番の被害者になったのです。不知火海のいろいろな野生生物も犠牲になっていたのですが、自然の近くにいる人ほど、大きな被害を受けたということにショックを受けました。また、野生のトキも元々は水田や里山など人間のすぐそばに暮らしていた鳥がもうすでに10羽を切るくらいに追いつめられていました。そのこと自体が、自然と人間が共存していく可能性がどんどん失われていくのかなという危機感になって、中学生なりになかなり真剣に、どうやって自然と人間が共存できるかを考えていました。

一方で社会的な背景として、当時はベトナム戦争もありましたし、ソ連とアメリカの対立が激しい時代でもありました。僕のすぐ上の世代の大学生が学生運動で機動隊と衝突しているところなども代々木公園で遠目に見ていました。新宿駅が燃えたりしたのを覚えています。ああいう

やり方を見ていて、力づくで、力と力がぶつかりあう形ではなく、自然と人間が共存できる社会に変えていくことはできないか、何かそういう方法があるのではないかと漠然と考えていました。自分でこつこつと力をつけて、何か新しい方法を考えていけば、いつかそういうアイデアが見つかるのではないかと思ったのです。

飯島さんは、中学でも高校でも勉強したいことを独学しました。ちょうど、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』が発行され、有吉佐和子の『複合汚染』が新聞で連載された頃です。衝撃を受けた飯島さんはそこに出てくる自然農法の話や生態濃縮の話、それを調べるためにまた別の本を読んだり、いろいろ勉強していきます。また物事の全体をきちっと認識し、それを人に伝えるために表現力を身につけたいと絵画の勉強もはじめます。

高校を卒業してからはプロの画家についてずっと修行し、その間、青果市場でアルバイトをしながら、哲学書を読んだり、科学書を読んだり、ずっと独学を続けていました。生物

について詳しい飯島さんは、25、6歳の頃、知り合った筑波研究学園都市にある農林水産省の研究者から一緒に研究しないかと誘われます。

飯島さんはその研究機関に勤めながら、アサザプロジェクトを立ち上げました。

の数値で表しているけど、それは君たちがやられている偏差値と同じで、数少ない基準だけで比較すると一人ひとりが持っている豊かさや可能性が見えなくなってしまうのでしょうか。

あれほどダメだといわれた湖が、こんなに面白いプロジェクトが始まって、いろいろな人たちが集まってきて、琵琶湖よりも有名になってしまったという話をすると、やはり中学生が一番、ビーンとくるみたいです。近くの湖や里山に対する見方が変わるだけではなく、人間や社会に対する見方も変わってきます。中学生くらいになれば、自我が芽生えてくるので、自分で物事に対して、積極的に働きかけていくとか、自分の中の可能性をもっと見つけ出していくとか、ほかの人との比較にしば

中学生によるまちづくり

自然の働きと人間の知恵で問題を解決

学校では、種を持っていったり、アサザの育て方を説明するついでに、1時間の授業をさせてもらっています。今も毎日授業です。年間1万人くらいの小中学生に会っていると思います。

例えば中学校などではもちろんアサザプロジェクトの企画に参加してもらうわけですが、僕の中学生時代の話結構するんですよ。どうして自分がこういうことを始めたのか、僕がアサザプロジェクトに込めている思いというのは何なのか、力づくではなく世の中を変えていくとか、自然のはたらきを理解する知恵を持って、その自然のはたらきと人間の知恵をかみ合わせながら、新しいものを生み出していく。そして問題解決をしていく。それはすごく面白いことなんだよ、と。

自然を保護するとか、環境を守るということは、創造的な活動なので、

「〇〇しない」とか「〇〇やめよう」だけではよくならない、という話を、僕は必ずします。また、大人たちが「死の湖」などとダメな烙印を押した霞ヶ浦という場所にも、必ず可能性があって、その可能性を、僕が小学生、中学生の子どもたちと一緒に見つけ出して、それでこれだけの事業をおこせるところまで来たこと。湖を水質という一つの基準だけで比較をして、CODだとか、リンや窒素



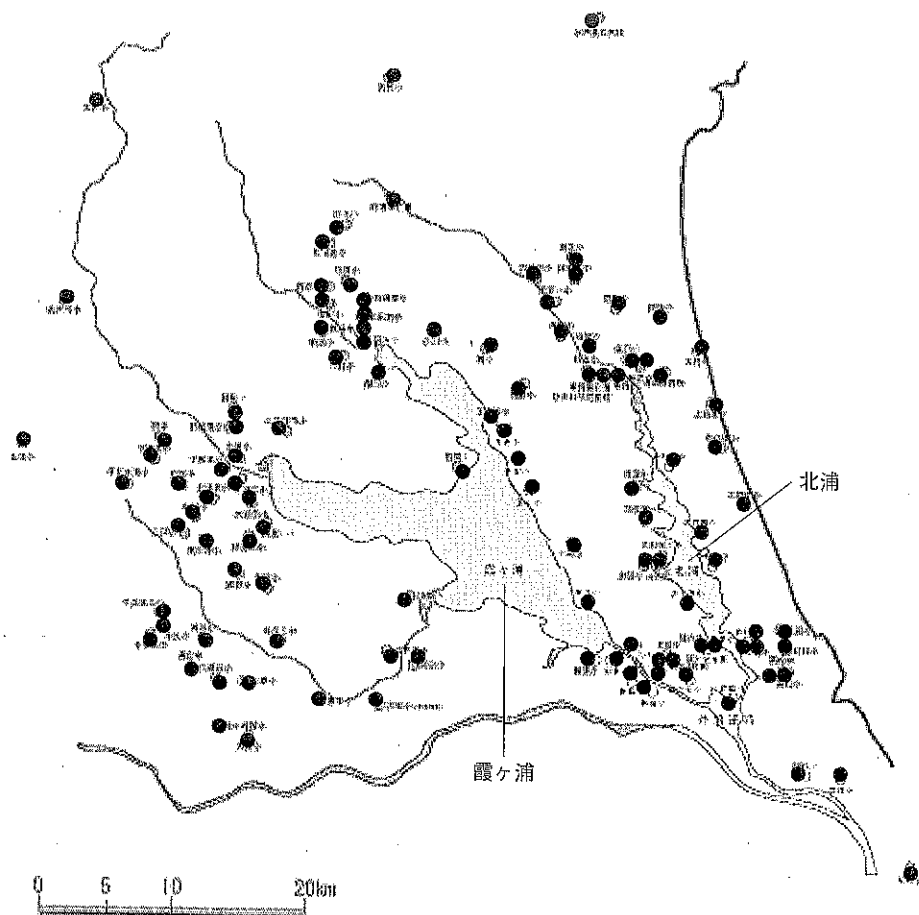
中学生にアサザの育て方を教える出張授業

られないで自分をもっと正面から見つめ直していくとか、そういうきっかけになっているかもしれません。

中学生が新しい社会システムをつくる

アサザプロジェクトの提案を受けて、霞ヶ浦流域の113校で、学校ビオトープがつくられています。ビオトープには、霞ヶ浦産の水草を植え、中には学区内のメダカとタニシだけをいれます。学区内にいろんな環境が残っていれば、様々な生物が集まってきます。そうやって集まってくる生物をモニタリングして、日常的に観察を行っています。

新しい社会の仕組みを作ること、子どもたちがかかわっているのです。これは子どもたちも感じていると思います。今まで誰もやってこなかった生き物の道の地図を作ろうとか。大人たちが今まで作ってきた地図は、人間の道路が書いてあるけれど、カエルだとかトンボの道は全く書いていないだろう、と。世界で初めての生き物の道の地図をつくらうよ、というような形でやっていくわけです。霞ヶ浦流域全体の環境を、ずっと監視していくためのシステムを作っていく。しかもこれは、どんなにすごい研究機関でも、あるいはものすごい装置を作って、先端技術を使ってやったとしても霞ヶ浦流域



アサザプロジェクトでは、流域の113の小学校にビオトープを作り、水草の保護育成や生物モニタリングなどの活動を総合的な学習の一環として行っています（●印が参加校の場所を示しています）

全体をくまなく、しかも毎日モニターが観察をして情報を監視するシステムをつくるのは難しいと思います。でも仲間ですとできてしまった、これだけたくさんの小学校、中学校が、みんなやってるんだ、って言えば、何か面白そうじゃないですか。

また、地元の牛久では、地域コミュニティの再生と、自然環境の再生、霞ヶ浦と、そういう環境教育のプログラムを、教育委員会と共同で行っています。「人とカッパが会おうま

ちづくり」。小中学生によるまちづくり事業です。そのプランを作っています。中学生はかなり細かい調査をしてくれています。本当に使えるデータがあがってくるんですね。かなり具体的な提案も上がってきています。それこそ里山を守ったり、河川を守ったり、湖を守っていくための、具体的な提案を新しいまちを作るなかで行う。そういう提案を子どもたちにしてもらおうと思っています。

「総合化する」とは「自己組織化する」こと

支援者にはビジョンが大事

総合的な学習を進める上で支援者

にはビジョンが大事だと思います。それは押しつけるわけではなく、ビジョンを持っている人と、子どもたちが触れることが大事なのです。ビ

ジョンを持った人たちの人格から感じられるものが、子どもたちを突き動かしていくのだと思います。

ビジョンの実現のためにこそ、総合化が必要なのであって、ビジョンはただ語るだけではダメです。ビジョンを本当に実現させるために動いている人。それを少しでも実現させている人。それが、総合化ということの意味を、子どもたちに、生身で伝えることになると思います。

いろいろなことを雑多に知っているということは総合化ではないし、いろいろな経験をするということも、総合化ではないのです。様々な立場の人達の意見を聞くということも、実は総合化ではないのです。「総合化する」ということは、「自己組織化する」ことです。自分の中でバラバラだったものが、つながってくる。外ではなく、自分自身の中で、自分の一部として、成熟してくることが「総合化する」ことなのです。

山でずっと山仕事をしてきた人と会うと、やはりすごいです。何でも知っているし、全部自分のものになっていますよね。実際に道具を使えば、その通りにできるし、体もその通りに動かせる。それで初めて総合化されたといえるのです。

総合化することは、外から与えるのではなく、自分から引き出すのです。僕の場合でいえば、中学生の頃に、力づくではなく、当たり前ものを当たり前前に結びつけながら、社

会を変えていくことができるのではないかなという、漠然とした思いが、自分の中で本当に湧き出てきた。そういう一つの思いが、自分の中で総合化をする能力を身につけていく、一番の原動力になっていたのです。

面白いことに、一人ひとりの中で総合化されたものは、一般化できるんですよ（しかし、一般化された手法で統合化することは困難です）。例えば、アサザプロジェクトは、僕の中で総合化されているのです。それがこうして社会化されて、たくさんの人に参加してもらって、いろいろな別の分野の、それこそ、経済界から、行政から、研究者から、みんながこのプロジェクトの理念とかシステムをなんとか活かそうとしています。そのことに子どもたちが気づけば、すごく生き方が変わると思います。

「飯島さんの生き方を参考にすると、総合学習とは、自分が関心を持っていたり、直面している課題を解決するために、分野にかかわらず今持っているありったけの知恵や知識の上手な使い方を、みずから学ぶことだということがよくわかります。」（『環境とつきあう50話』岩波ジュニア新書より）

子どもの全体認識力、大人の理性の意志

小さな子が例えばアリを殺すと、「痛い！」っていいいます。自分とアリとが、まだ未分離な部分があるんですね。そういう、世界と人間がつながっている、自分自身とがつながっている、すべてのものがある意味でつながっているのだと感じられる感性、それが子どもなのです。子どもが持っている総合化する、全体を感じ取る、全体を包みとってしまうような強い意志と、一方の大人が持っている理性、知識に基づく分析的な、細かく物事を分けて、評価して、組み立てていこうとする意志とが、うまく協働しあうことによって、豊かな創造が生まれてくるのです。

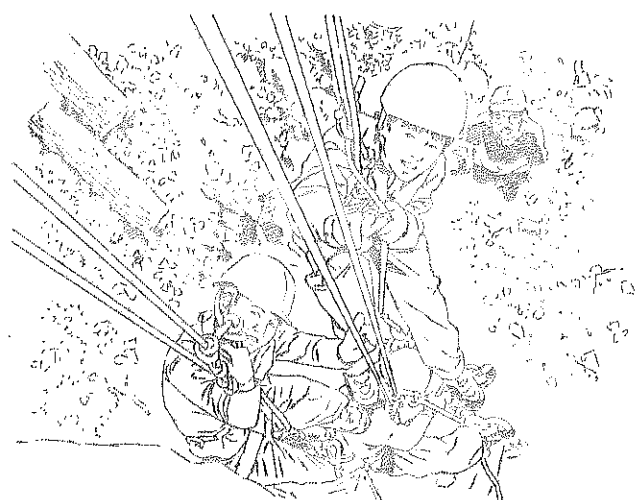
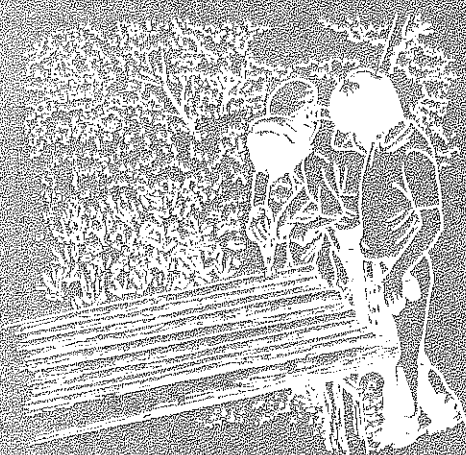
大人たちも子どもたちに手助けしてもらって、自分たちが持っていない全体認識、総合化への意志や感性を、子どもたちからいただく。子どもたちも、大人たちから、科学的、分析的なものの見方や細かく分析したものを、さらに組み合わせで構築していくものの見方、いろいろな段取り、そうしたものを学んでいく。この2つがうまく組み合わせられれば、新しいものが生まれてきます。子どもと大人が、お互いのよさを引き出しながら進めていくのが総合的な学習だと思います。（談）

森で学ぶ活動プログラム集

3

中学校の総合的な学習

全国林業改良普及協会 編



「森」が先生です。森で学ぶ学習プログラムがまるごと1冊。

中学生の森林・林業教育を支援する活動プログラム集です。

教員、地域住民、NGO、行政みんなで

中学生の参加・行動力を引き出します。

中学生と教員、地域住民、NGO、行政みんなが
一緒に参加行動します。

中学生
対象

定価2,100円 本体 2,000円